

平成29年度 広野町

いいな広野 わが町発見

シネリテラシー
ふるさと創造・映像教育プロジェクト
報告書



ひろの映像教育実行委員会



もくじ

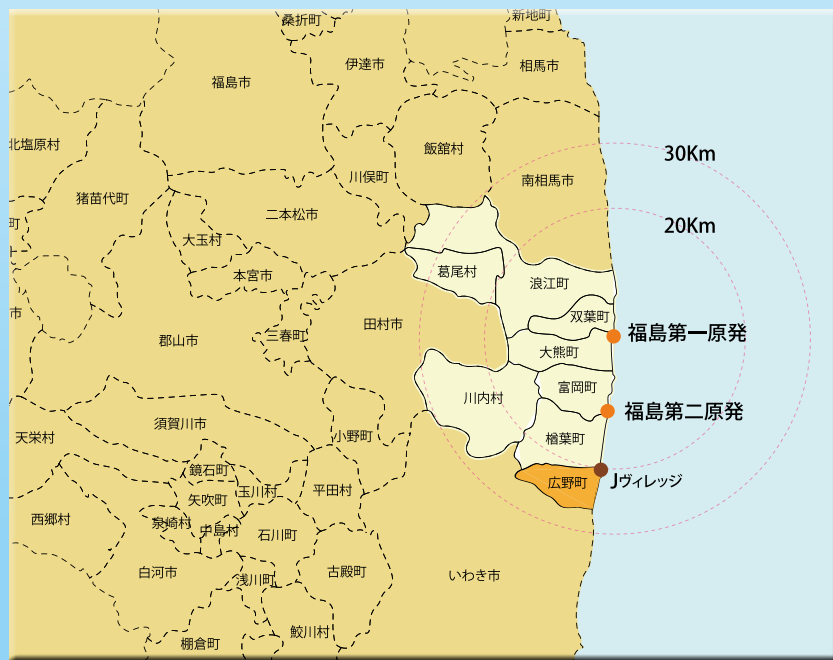
1.	広野町と映像教育	・・・P4
2.	シネリテラシー	・・・P5
3.	アクティブラーニングとしてのシネリテラシー	・・・P6
4.	ひろのモデルへの期待	・・・P7
5.	平成 29 年度 いいな広野わが町発見 —ふるさと創造・映像教育プロジェクト—	・・・P8
6.	プロジェクト概要	・・・P9
7.	映像制作スケジュール	・・・P10
8.	完成作品上映会講評	・・・P13
9.	学生スタッフ感想	・・・P16
10.	プロジェクトへの賛同	・・・P21
11.	プロジェクト総括	・・・P22
12.	【参考】各地での発表（2017 年・2018 年）	・・・P24
13.	いわき FC 広野中学 OB からのメッセージ	・・・p25

はじめに ― 広野町と映像教育 ―

福島県双葉郡広野町立広野中学校では、平成 27 年度から総合的な学習の時間を活用して、地域取材し映画制作を行う教育手法「シネリテラシー (CINELITERACY)」の取り組みを続けている。

広野中学校がこの教育手法を採用した背景には、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故によって、故郷からの避難を余儀なくされた双葉郡の現状がある。慣れ親しんだ土地から離れざるを得なかった双葉郡の各自治体では、故郷への正しい理解をどのように次世代に促すことができるかが教育課題の一つであった。

その課題解決への一助として、双葉郡内の各小中学校では「ふるさと創造学」を導入し、総合的な学習の時間などの学習の中で、地域に着目した学びの推進がされている。広野中学校では、ふるさと創造学のアプローチとして、子どもたちが映像制作を通じて学習の目標に到達することを試み、平成 27 年度から中学校 1 学年が映画制作に取り組んでいる。



福島県双葉郡と広野町の位置

シネリテラシー <CINELITERACY>

広野中学校が採用した教育手法「シネリテラシー」とは、映画制作を用いた主体的な学びの手法である。シネリテラシーは、オーストラリアにおいて公教育として導入され、国語教育の一環として行われてきた。映画制作を用いる主な理由は以下の三点である。

- 1) 映画は多様な役割によって制作される
- 2) 制作の仕組みを理解することでメディア・リテラシーを向上できる
- 3) 制作の過程を通じて多様な存在を認め合う

これらの理由の背景には、多文化多民族国家であるオーストラリアが抱える教育の課題があった。それは、移民を多く受け入れる中で、国語(英語)力をどのように習得することができるか、また文化や宗教など異なる背景への理解を促し、多様性を向上させる教育が求められたからである。このような社会課題の解決の一助として、シネマ(映画)を用いたリテラシー(識字)教育であるシネリテラシーがオーストラリアで展開されてきたのである。



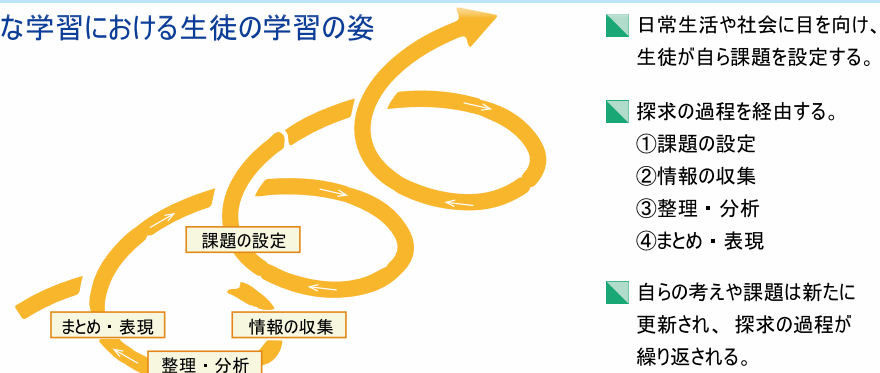
アクティブラーニングとしてのシネリテラシー

近年、日本においては、主体的な学びの総称「アクティブラーニング」が注目を受け、文部科学省は次期学習指導要領においても「主体的・対話的な深い学び」の実践を促している。他方で、アクティブラーニングという言葉が国内で市民権を得る前から、ユネスコを中心とした国際社会では主体的な学びが教育の主流とされ、実践が行われてきた。

オーストラリアにおけるシネリテラシーもまたアクティブラーニングの教育手法である。子どもたちは、テーマ設定から議論を開始し、テーマを掘り下げる過程で「考える機会」を多く経験をする。また、取材をするにあたり、質問に向けた準備や、取材対象者の選定など、「多様な視点」を想像しながらプロジェクトを進める必要を経験する。さらには、最終的に「どのようなメッセージ（何を伝えたいか）をメディアを介して誰に届けるか？」について自身の考えを主張しながらグループで一つの成果物を完成させる「合意形成」の重要さを経験する。

こういったプロセスが単なる表現学習の枠に留まらず、社会の中でどのようにコミュニケーションをはかり、どのように他者とプロジェクトを進めるかという重要な能力を育むアクティブラーニングの実現を可能にする要素となっている。

探求的な学習における生徒の学習の姿



中学校学習指導要領 総合的な学習の時間編 平成 20 年 9 月（文部科学省）、
中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成 20 年 9 月（文部科学省）より抜粋

ひろのモデルへの期待

映画制作を通じた学びの手法はこれまで国内各地でも行われてきた実例があるが、災害被災地における地域理解とソフト面からの復興を目的とした映像制作教育は広野町の取り組みが先進的なモデルである。初年度となった平成 27 年の取り組みを総括する中で、災害被災地における実践の要素の中に、他地域での汎用の可能性が示唆された。それは、地域の担い手として必要不可欠な「地域理解」の学びと、復興に向かう災害被災地における「心の復興」の二点であった。

地域理解は、その学びの有無によって地域への愛着や当事者意識に相関があると考えられる。人口減少社会において、限られた人口をどのように地域の中で維持するかが課題になっている地域も多いが、地域理解を促し地域の担い手としての当事者意識を育むことが地域にとって重要となる。

心の復興は、災害被災地におけるハード面の復興と同時並行して取り組まなければならないソフト面の復興とされている。復興の担い手は、地域住民であり、その担い手の心のケアやモチベーションの維持は復興において大切な要素となる。他方で、この要素は災害被災地のみに限ったものではなく、変わりゆく地域の中でどのようにマインドチェンジを行いながら未来を描くことへの意欲を促すかは、国内の各地域、特に高齢化率が高い限界集落や過疎地域における教育課題の一つでもある。

ひろの映像教育実行委員会では、地域理解と地域運営へ主体的に関わることを促す要素を含んだ映像制作教育の取り組みを「ひろのモデル」とし、ひろのモデルが地域課題の解決の一助になり得る地域への推進を行っていくこととしている。

平成 28 年度には東京都豊島区が採用し、次年度で 3 年目を迎える。また県内では、今年度に飯館村立飯館中学校が広野中のモデルを参考にふるさと学習で採用し、飯館村の PR 動画を制作するなど、各地で拡がりをみせている。



平成 29 年度 いいな広野わが町発見
—ふるさと創造・映像教育プロジェクト—

今年度で 3 年目を迎えた広野中学における映像教育プロジェクトは、生徒、教員、役場、町民、外部講師などによる協働の色がこれまで以上に濃く見られた取組みであった。昨年度同様に 1 学年の総合的学習の時間の大半の時間をシネリテラシーに充てる中で、外部講師と生徒との関りを昨年から大幅に増やし、1 学期の早い段階において「映画をつくる」ことを意識する機会が創出された。

また、生徒たちは夏休みを活用して事前取材を試み、教員らは取材先との調整やロケハン（下見）などを行うなど、生徒たちの主体性を尊重する教員らの積極的な姿勢が多くみられる取組みでもあった。

2 学期における外部講師と学生スタッフが加わっての集中的な作品制作では、映像制作分野の一線で活躍する若手映画人が生徒たちと向き合い、そのグループを学生スタッフが支えた。学生スタッフは、異なる分野・フィールドで学ぶ学生が 10 校もの大学から参加し、異なる立場や役割での協働を行う重要な要素を担った。

3 年目を迎え、生徒たちの「映画をつくる」という過程を通じ、それぞれの異なるプレイヤーが協働しながら、生徒たちとともに広野町と向き合ったプロジェクトに発展した印象を受けた 1 年となった。



プロジェクト概要

全 体 統 括	千葉 偉才也	(一般社団法人リテラシー・ラボ)
制 作 統 括	島田 隆一	(JyaJya Film)
講 師	伊賀 俊徳	(RESTA FILMS)
	佐藤 憲吉	(NPO 法人シャローム)
	田中 圭	(だいふくフィルム)
	前田 大和	(だいふくフィルム)
上 映 会 講 師	山内 大堂	(ダイドウシネマパッケージ)
	中山 周治	(日本映画大学)
	久保田 彩乃	(一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ)
	鈴木 慎悟	(NPO 法人若者就職支援協会)
庶 務 ス タ ッ フ	富岡 宏泰	(味と湯の宿ニューとみよし)
	メイキング制作	
	國友 勇吾	
	奥村 駿	(日本映画大学)
学 生 ス タ ッ フ	梅田 優弥	(宮城大学)
	片山 弘大	(北海道大学)
	熊谷 真奈	(宮城教育大学)
	齊田 直樹	(國學院大學)
	鈴木 祥華	(英国サセックス大学大学院)
	瀬川 早紀	(秋田公立美術大学)
	武 睦月	(大妻女子大学)
	戸島 彩香	(大正大学)
	星野 由梨	(大正大学)
	町田 優衣	(早稲田大学)

映像制作スケジュール

事前学習

4月～7月

今年度は、事前授業への外部講師参加を大幅に増やし、1学期の「ふるさと創造学」開始段階から制作統括の島田講師を中心に授業へ参画を行った。増加した授業への参画では、テーマ設定や物語の作り方などの指導が行われた他、問題の捉え方、課題の深掘などを、「議論→発表→再検討」のサイクルを繰り返しながら取り組んだ。複数回に渡る事前授業の上に、各班の担当講師が加わる形式となった。



7月19日(土)

各班ごとの担当講師が加わり、生徒達から講師への1学期の段階での進捗状況やそれぞれのメンバーの考えなどを共有し、チームとしてどのような作品を制作するかを青写真を描き始めた。

また、例年と異なる部分では、昇竜太鼓班とサマーフェスティバル班の2班が夏休み期間中の取材を希望したため、教員との協議の上、8月11日に町内で開催されるサマーフェスティバルへの取材を試みるようになった。



昇竜太鼓班とサマーフェスティバル班では、議論の中で8月11日に開催される「広野町サマーフェスティバル2017」への取材の必要性が生じ、教員の協力のもとでそれぞれ2班が取材を行った。

昇竜太鼓班は、フェスティバルに出演する広野昇竜太鼓を取材し、太鼓演奏を聞いたのちにインタビューを行った。サマーフェスティバル班は、フェスティバルに出店している店舗への手伝い業務に参加し、町の方々との交流を深めながら、フェスティバルを運営する側の視点を学びつつ取材を行った。



8月11日(金)

9月5日(火)

2学期が始まり、プロジェクト期間前の最後の授業。班付きの講師も入り、1学期の振り返りを行い、翌週に控えたプロジェクト期間での取材計画の確認、インタビューの練習などを行った。



プロジェクト期間

9月11日（月）1日目

午前中は、取材計画に基づいて各班とも取材・撮影を行った。午後は、取材の振り返りなどを行い、翌日に向けた取材計画の練り直しを行う班もあった。机上でイメージを膨らませたことと、実際にインタビューなどを行ってわかったことの修正を行うなどをし、翌日に備えた。事前授業と異なり、プロジェクト期間には各班に大学生スタッフが2名配置され、生徒と講師の間に立ってチームビルディングの役割を担う。この日は、学生スタッフが入って、初日でもあり、学生スタッフも生徒も少し緊張していたが、時間と共に緊張は緩和されてグループとしてまとまり始めていた。

9月12日（火）2日目

午前中は、前日の取材での振り返りを踏まえながら、取材計画を遂行。取材を行う中で、徐々に作品の中でどのようなメッセージを訴えるのかについての問いをグループ内で共有した。午後は取材してきたことを振り返りながら、作品を通じて何を訴えるのかについて、グループとしての考えをまとめた。

9月13日（水）3日目

午前中は各グループともにナレーションの録音や作品のタイトル決めなどの最終仕上げを行う他、午後の上映会に向けて作品ポスターの作成に取り組んだ。午後は、完成作品上映会を開催し、保護者や町民など多くの方々が来場した。

上映会後には、プロジェクトを共に取り組んだ外部講師と学生スタッフとの最後の振り返りを行い、最後は事前授業から長きにわたり指導をした制作統括の島田講師が一本締めをして3日間におよぶプロジェクト期間を締めた。別れを惜しむスタッフと生徒の光景が、プロジェクトの充実を物語っていた。

高瀬校長



上映会司会の生徒



上映会



遠藤町長



完成作品上映会講評 日本映画大学 講師 中山周治

年を重ねるごとに作り手の生徒の肩の力が抜けて、より自然体で自分たちを出しているように思えます。肩の力が抜けているというのは、手抜きをしているという意味ではもちろんありません。見せ方がうまいというか、どう見せるかを楽しんでいるというか、そんな印象があります。もちろん、そこにはカメラに映らないところでの緊張感、周到な準備、様々な苦労があったのでしょう。今年の作品の特徴は、これまで以上に多くの町民がインタビューに応じていただけたことがあげられます。これは、このプロジェクトを立ち上げたメンバーの一人としてとても嬉しいことです。多くの町の方々、このプロジェクトに関わり、町の素顔、町民の飾らない言葉が写り込むといいなあと願って始めたのですから。簡単ですが作品ごとの感想を書いてみました。



各映画のポスター



広野、サッカー未来へ！～僕たちサッカーのために～



「サッカーに出会える町って、出会えてねーじゃん！」という疑問から取材が始まるどころが、まず観る者を惹きつけました。また、この班がやったことで良かったのは、取材の道すがらたまたま出会ったひとに意見を求めたところ。予めインタビューをお願いしていた人たちに混ぜてこうした自然体のシーンがあることで、より臨場感のある作品になりました。

取材地に向うところでの雑談も同じような効果がありました。実は見事な演出だったのかな？訪ねた先のJFAアカデミーの担当者に「広野はサッカーに出会える町だと思いますか」とストレートの質問をぶつけたところも良かったです。男子生徒たちが、「Jビレッジで食事をして、ピッチでボールをける姿を見て、多くの人が「サッカーに出会える町広野」の未来像を見たのではないのでしょうか。男子チームならではの良さが作品に現れていました。

うみとみどりがつなげるワ～未来を想う人々の願い～



初年度と2年目の作品にも沿岸部が取り上げられていました。やはり広野の人たちにとって海はなくてはならない特別な存在なのだなと感じました。町の人々へのインタビューから始まって、防災緑地を設計した人、それを守る活動をしている人をつないでいく構成はとても説得力がありました。進行役の2人は面白みを醸し出して、良い味を出していました。

インタビューはゲストの言葉を引き出すのが仕事ですが、そのインタビューの個性が出ているのはとてもいいことです。2人ともよく防災緑地の果までよく走っていました。カメラさんたちもよく走りました。根本さんが、昔は広い浜で運動会をやったと話していましたが、ラストシーンで生徒たちが波打ち際で海藻やボールを拾うシーンがありましたね、ここに妙にリンクしたのです。ドローン撮影もハッとしたけれど、このシーンがとても印象的でよかった。誰が遊んだボールなんだか、ただのボールでないような、ストーリーが秘められているような錯覚さえ覚えます。

とんぼの里「ひろの」～心に残る色^{けしき}を歌にのせて～

根本さん、鈴木さん、中津さんの3人にインタビューをして「とんぼのめがね」という童謡のルーツを探る作品ですが、この3人の言葉を見事に引き出していました。言葉だけでなく、その人柄もよく引き出していたのは、取材班の力ですね。ちょっとミステリーのようなツカミがあって、根本元町長の初めの話を聞いただけではだれが箒平（ほうきだいら）に

往診に行ったのかよくわからない。で、次の箒平区長の鈴木さんの話を聞いて、額賀（ぬかが）先生という童謡の「とんぼのめがね」を生んだ人がいたことがわかる。そして、中津さんの「ひろの童謡（うた）まつり」の話題にうまくつながる。最初のシーンでとんぼが飛んでいましたが、ラストシーンではざわざわと草が風になびくだけでとんぼは飛んでいない。本当はとんぼが飛んでいるシーンを撮りたかったのかもしれないけれど、逆に飛んでいないことによって色々解釈ができてむしろ良かった。そこに見えないからこそより鮮明にとんぼ現れてくるとも言える。最後の合唱歌は最高でした！頭の中で色（けしき）が水色からピカピカ、そして赤色に移ろい、ジーンとききました。額賀先生像に迫る続編を来年作ってほしいなあ。

未来へ昇れ！昇龍太鼓



冒頭のシーンでカメラが昇って行ったのには驚かされました。ツカミはバッチリです。これまで3年間の作品の中で、この作品と「みんなでつくるサマーフェスティバル」がダントツで登場人物が多かったですね。これは特筆すべきことです。多くの町民、それに、この映像教育プロジェクトの1期生である広野中の3年生たちも写っていました。広野町サマーフェスティバルのイベント会場にカメラが入り、

フェスティバルの様子をいきいきと映し出していました。当日のお客さんにインタビューしたのもよかったですね。「知らない人にインタビューするのはやっぱり緊張する。」「いえの人と話している方がなんぼか楽」とインタビュー後の感想をもらっていましたが、インタビューもナレーションもとても立派で、インタビューに答える人も話がはずんだように思えます。私が一番良いなあと思ったシーンは西本さんの太鼓演奏を体育館で聞いているときの2人の表情です。2人とも言葉は出さずとも笑顔で「西本さんすごい」「太鼓すごい」と感動を伝えている。カメラマンはこのいい表情をよく撮りましたね。

みんなでつくるサマーフェスティバル～忘れられないひろのまち 心をつなぐひろのまち～



この作品が画期的だったところは、映画を撮るこの班の中学生在がフェスティバル参加者でもあり、取材の対象だったところ。自分たちが撮影しているシーンも入っていましたね。これが祭りの雰囲気と相まって、自分たちも祭りを盛り上げ、楽しむ一員になって、まさにタイトル通りの「みんなでつくるサマーフェスティバル」になっていたのが好印象です。手

持ちのカメラがずんずんと祭の人混みの中に入り、画面が揺れていましたが、これも臨場感を出すためには多少目をつぶりましょう。でないと、「カスタードの中にとりの小豆が一つ入っている」と聞いて、すかさずカメラがカスタードに寄って行くなて芸当はできませんよね。カメラマンもよく頑張りました。ラストシーンは印象的でした。「広野町をWEBで発信したい」、「役場で働いてフェスティバルに関わりたい」と夢を語っていました。祭の主催者の鈴木さんが2017年に6年目を迎えたサマーフェスティバルが、前年に比べてぐっと明るくなったと嬉しそうに語っていましたが、皆さんが20歳になることにはどう進化しているのでしょうか。楽しみです。

最後に、広野町の魅力が、今年も画面いっぱいに表現されていました。皆さんの作品作り自体が広野の魅力としてさらに続いていくこと。DVDに残された作品が町の財産、皆さんの心の宝になっていくことを願っています。

学生スタッフ感想

梅田 優弥（宮城大学）

2回目の参加だった今年度の映像教育プロジェクトでは、佐藤憲吉さんのご指導のもと、中学生たちとの撮影・製作・編集作業を全面的に任せていただいた。「ひろのサマーフェスティバル」というテーマをもとに、撮影した映像と中学生たちの考え・思いを「編集」によって、どのように「映画」としてまとめ上げるかを学んだ。自分の考えを言葉にしたり、表現したりすることは難しいことである。今年で成人となる私も、未だにその難しさに頭を悩ませる。中学生たちも同様であった。彼らは、彼らなりに「広野町」について考え、それをカメラの前で、慣れない撮影に戸惑いながらも表現してくれた。私は、彼らとの活動の中で気づいたことがある。それは、彼らには、「言葉には（まだ）できないが、なんとなく抱いている『思い』がある」ということである。これが、今の彼らの姿であった。広野町に関わる人たちの話を聞いて、たくさん考え、自分なりの願いや意見を持ったと思う。うまく言葉にはできないが、「考える」ことは出来たのだと思う。今回、作り手側であった私は、つい「言葉」を求めてしまった。本来は、そのような彼らを理解し、その姿を映画に記録し、伝達することが私の役割であった。このプロジェクトでは、作り手としての立ち位置、責任、映画というメディアの意義について考えた。これは「メディアデザイン」を学ぶ私の大学生活において、貴重な体験となった。作り手として、これからのメディアづくりで自分は何が出来るのか、何を考えるべきなのかを引き続き探求していきたい。

片山 弘大（北海道大学）

今回の「ひろの映像教育プロジェクト」での貴重な体験は、「映画」という新しいツールを基にして公教育に関われたことです。映画撮影というプロセスは中学生の皆さんにとって未知の領域でありますし、もちろん私自身も初めての体験でした。「映画」という新鮮な環境の下、普段の授業とは全く異なる雰囲気の中で「地域再発見」の授業を実施できるのは、中学生の皆さんに心に残る思い出として残り、広野への郷土愛を抱いてもらうという地域創生に大きく貢献できると考えます。

武 睦月

このプロジェクトに参加して今まで味わったことのない経験をたくさんできました。1番印象に残っていることは子供たちのキラキラした瞳を間近で見られたことです。私は塾講師をしていて子供たちとふれあう機会が多いと思います。でも、授業や勉強ではなく自分たちで考えて1つのものをみんなで創り上げるということを通してでしか見ることができない瞳だったと思います。大変なこともありました。このプロジェクトに参加できて本当に良かったと思います。

瀬川 早紀

最初は撮影に関してのお手伝いだけの収穫になる体験でなと思っていました。しかし、それ以上にたくさんいい経験が出来ました！被災地が今どういう状況なのか、改善するためにやっていることとか、ほんの一部分ですが…この目で知ることが出来てとってもいい体験でした！

星野 由梨（大正大学）

被災した地域出身で、私も地元で映画を作った経験があったので、広野町での活動を楽しみにしていました。伊賀さんから事前に昇龍太鼓班について丁寧に説明してもらいました。求められたのは女の子達のフォローに回り、撮影に関わってくれるようにアシストして欲しいとのことでした。女の子達は思ったよりは最初から打ち解けてくれました。仲良くなろうと思い、「頑張ったね」、「ありがとう」というプラスの言葉をかけるように意識しました。私が昔に体験したときに感じたのは、カメラや演者、音声以外の機材に触れられない生徒は暇になっちゃうってこと。カメラ担当の子達が一生懸命やって褒められている姿を見ると、暇だと感じていた子は自分がいなくてもいいじゃんって、距離を作っちゃうことも…。だから2カメで、交代しつつ何かしらの仕事が回ってくる機会がみんなあったことで、チームの一員として作っているって気持ちになれたと思います。生徒だけで話し合いしたり、指示をしあったり、自主的に行動する姿も徐々に見られ、とても頼もしく感じました。

太鼓を昔やっていた寛太君や祐志君は毎週金曜日に行っている太鼓の練習会に行きたい気持ちが高まったようでした。彼らはサッカーや部活をやるため、太鼓をやめたいらしいです。嫌になってやめたのではなく、成長するときに幾度とある選択の場で太鼓ではないものを選んだだけ。そして、それに未練があると。けれど、今回の活動で彼らはまた選択する機会を与えられました。おいで、と言ってくれた西本さんがいて、一緒に太鼓を叩いて楽しかった気持ちを思い出して、昇龍太鼓について学んで、彼らはまた太鼓に触れなくなっただって思うと感慨深く思いました。

上映後はなんとか終わったっていう安堵から、終わっちゃったっていう寂しさから、そして生徒の頑張りや考え方に感動したから泣けました。終わりの挨拶でも、まさか手紙をもらえて、しかも泣いてくれる生徒が出てくるなんて思わなくてもいい泣きしちゃいました。この班で、この子達と一緒にやれて、チームに入れてもらえて、テーマが昇龍太鼓で、インタビューした人が魅力たっぷりな人で、本当に恵まれていました。一生の思い出ができました。来年から広野町で私も頑張ります。

鈴木 祥華

映像教育プロジェクトに関わるのは今回で2回目。でも福島県双葉郡広野町での活動は初めてでした。学生スタッフとして、子ども達が楽しくやっていける環境を作りつつ講師の方の負担を少しでも担っていきたいと目標を設定しつつ当日が楽しみで仕方なかったです。

私はサッカー班で6人のうち5人がサッカー経験者がサッカーを実際にやっている子達でした。Jビレッジと関わりが深い子や、震災後にサッカー部がなくなり野球部に移籍するしか無くなってしまった子など、班員それぞれがサッカーとの関わりやサッカーへの思いを多様な形で持っていました。そんな中で彼らが共通して持っていた考えは「サッカーと出会う町とかいうくせに広野ではサッカーと出会えない」という思いでした。撮影中は、やったことないことばかりだし、大人に囲まれて、色んなところを歩き回りながら、本当に大変だったと思います。しかし純粋にサッカーを楽しみたいという思いがモチベーションに変わりチーム内での大きなエネルギーとなっていました。(あと代表の料理人西さんに会えるということも大きなモチベーションになっていたことはいうまでもありません。)

講師の前田大和さんが、子供たちのやりたいことを汲み取り、会話の中で色々伏線を張るのですが、予想の斜め上をいく言動をするパワフルでひたすらパワフルな彼らは、良い意味で制御不可能で、むしろ自分でやりたいことをひたすら追いかけるその姿は、自分で決断し取捨選択したものにどこかしら後悔を覚えていた私に取って、とっても刺激になりました。それはイギリスに留学に来た今でも、私自身のモチベーションとなって、ふとした瞬間に思い出されます。

先日授業で、「社会組織に変革力はなく、むしろその活動は一時的緩和策でしかない」というトピックに対して反対派としてディベートを行う機会がありました。この時の論点は、活動に費用対効果がなかなか見出しにくく、結局規制をするのは行政なので個人と行政の間に存在する組織は、個人の「その時」のニーズを満たす一時的な特効薬でしかないということでした。結論として判定勝ち(社会組織に変革力があるという結果)を収めたのですが、その際に日本のケーススタディとしてこの広野町での活動を紹介しました。広野町の課題と可能性に焦点を当て、学校の授業を通して、子ども達が自ら興味のあることを掘り下げて行くのを、行政・組織・個人のレベルで協力し合いながら支援していること。そしてその試みが異なる町でも受け入れられ、新たにその地域の形に沿うように落とし込んでリテラシー・ラボという教育団体のサポートの下、個人が躍動していること。活動を紹介する中で、絶対にこのディベートには勝たなければ、と思いました。数字が出ないので変革力がないと決めつけるのは容易いことですが、サッカー班について回ったあの2日間、班員の表情や、インタビューした人々に共通する「サッカーを通して町おこしをしたい」という思いを思い出し、実際に広野町で多様なプロジェクトが始動し、相互に刺激しつつ密接に関係することを考えると、社会組織そしてその活動が一時的なものではないと決めつけることは出来ないと改めて強く認識した授業でした。

広野町、そして広野中学校の生徒たち、サッカー班の少年たちの成長が楽しみでなりません。ありがとうございました。

齊田 直樹(國學院大學)

広野中学校の子たちと最初に会った時は、よそよそしい態度で、口数も少なかったが、話し始めると中学生らしくて昔のことを懐かしく感じました。

私の出身の前橋市の小学校でも地元を歩き、地元の人にインタビューをするという授業はあったと思いますが、ふるさとを映像の撮影を通じて学ぶということは、数日間に渡り地域を自分の足で歩き、回っていくことになるので、学校の座学とはまた違う角度でふるさとについて学べると思いました。中学生にとっては、家族や先生以外の大人と関わる機会どころか、なす機会もないと思います。そんな中、大学生や職業人である撮影のプロ、地元の人々と話し、関わる機会はとても貴重なものだと感じました。3日という短い間でしたが、一日中行動を共にした子たちと別れるシーンでは少しうるっときてしまいました。

町田 優衣(早稲田大学)

今回のプロジェクトを通じて、初めて「シネリテラシー」という教育手法を知りました。「シネリテラシー」と「地域教育」を組み合わせ、広野中学校の生徒が、広野町を題材とし、内容を考えるところから撮影まで、プロの手を借りながら映画製作を行うことで、リテラシー教育に加え、実際に広野町内の様々なところに足を運ぶことにより、広野町のいいところや、地域の方々の優しさに触れ、広野町を自分達の誇りに思うきっかけになるプロジェクトであると感じました。

私が担当させていただいた班では「童謡」を題材に映画を製作しましたが、様々な方のお話を聞き、かつての広野町の情景などについても考え、改めて広野町における「童謡」を見つめ直すことにより、毎日町の色々なところで目にし、耳にしていたであろう「童謡」の見え方も変わったのではないかと思います。

また、生徒たちが、映像の「プロフェッショナル」と直接触れることができたことにも大きな意味があったと感じています。何かを極め、プロとして生きる大人の真剣さとかっこよさに触れ、私自身も憧れを抱くと同時に、自分の将来を考えるきっかけになりました。

私は東京生まれ、東京育ちで、あまり自分の住んでいる土地に思い入れがありません。だからこそ、広野町の生徒が映画制作を通して、広野町のことをより深く知って、地元を自身のアイデンティティとし、誇りに思いながら、これからの世界に羽ばたいていくことを羨ましく思うと同時に、少しでもそのお手伝いできたことを嬉しく思います。ありがとうございました！

戸島 彩香（大正大学）

私は映像制作に関して知識も技術は全くないため、自分にできることは限られてくるので、出来ることを精一杯頑張ろうと思い、やってきました。学生スタッフとして、講師や生徒へのサポートをしてきましたが、お役に立てていれば幸いです。しかし、知識がないため、どのような事を求められているのかを理解できていなかった場面が振り返ると見受けられたので、本当に申し訳なく思います。また、子どもとの関わりもこれまで経験が少なかったこともあり、中学生との接し方に戸惑ってしまい、どのように言葉を投げかければいいのか、どう話を引き出せばいいのか、とても難しかったです。

生徒たちと話しているなかで、地域について知らないことが多いのに衝撃を受けましたが、取材していくうちに町の歴史やさまざまな知識が増え、地域を理解するだけでなく、今後町をアピールしていくきっかけにつながったのではないかと感じています。

個人的な話になってしまいますが、私は宮城県南三陸町に何度も訪れたことがあり、町の復興について考える機会がありました。そして、今回広野町を訪れて一部でしたが町を見ることができ、同じ震災地域でも抱えている問題の違いや、どのようにこの先を考えているのか等に触れられる事もできました。

そして、今回の経験でとても視野が広がりました。また、自分に足りないものを知るきっかけになり、今後は自分に出来ることは何か、どんな事をすればいいのか等、先回りして考えていく力を身につけていきたいと思います。参加できて本当に良かったと思います。ありがとうございました。

熊谷 真奈（宮城教育大学）

今回このプロジェクトに参加させて頂いて一番感じたことは中学生って本当に凄いなあ、ということです。わたしが勝手に「中学生のできること」を頭で決めつけているだけで彼ら彼女らのやれることって実は無限大なんだろうなって思います。凄く可能性を感じさせる活動でした。普段はなかなか密に関わる機会のない中学生と真剣に向き合ったからこそ感じる事ができたのだと思います。

そして、活動中のみんなの一生懸命な表情や普段のお茶目な表情が、わたしは大好きでした。上映会中も表情豊かで、ワクワクドキドキがこっちにまで伝わってきました。上映会では、5チームの作品を鑑賞しましたが、どれも個性豊かで「広野町」ひとつをとっても色んな顔があるんだなあと感じさせるものでした。本当観ていてゾワゾワが止まりませんでした。

また、子どもたちと沢山笑えたことはもちろん、今回映像を作る様子を間近で見させていただけたことも、とても良い経験になりました！ ああいった機材に触れる機会は無かったので、撮影の時は子どもたちと一緒にのびのびとさせて頂きました。子どもたちとワクワクしながら活動ができとても嬉しかったです。また、編集のようすも夜な夜な作業しているところを見せて頂いて、とても貴重な経験となりました。映像やメディアのことを学んでみたいなあ！と強く思いました。学生ボランティアとして参加させて頂き、とても充実していて学びの深い時間を過ごすことができました。ありがとうございました！

プロジェクトへの賛同

今年度のプロジェクトには、例年以上に多くの協力者や企業、団体から協力をいただいた。特に、プロジェクトの公共性に賛同をいただいたドローンシェア世界トップの DJI JAPAN 株式会社から生徒たちに多面的な映像を提供するために機材の提供の他、関係企業に呼びかけを行っていただき株式会社スペース・ワン（郡山）からドローンパイロットの派遣協力をいただいた。また、シネリテラシーを推進してきたオーストラリア大使館も後援に加わり、プロジェクトがより多くの方々に知っていただく機会をいただいた。



DJI 社スタビライザー（OSMO）



スタビライザー撮影風景



ドローン撮影映像

ドローンパイロットの
嶋原氏と大和田氏

ドローン実演風景

プロジェクト総括

3年目の映像教育プロジェクト

一般社団法人リテラシー・ラボ 千葉 偉才也

今年度の取り組みは、「協働」というフレーズを意識することが多かった。それは、プロジェクトを行うにあたって例年以上に多様なプレイヤーが関わり、それぞれが役割の明確化を模索しながら、コミュニケーションを通じて同じ方向を目指すことを試みたからである。そしてそれは、教育委員会と学校現場の先生方が作り上げた環境であり、その上で外部人材が加わり、生徒たちと共にプロジェクトを成功させることができたのだと改めて感じている。

今年度の取り組みでは、外部講師が関わる事前授業の回数を増やし、早い段階から生徒たちと向き合い映画作りについて考えることができた。これは、生徒たちだけでなく、先生方と多く意見交換をする機会にもなり、プロジェクトを作り上げる上で大切な要素にもなった。1学年



自己紹介と取材の説明をする生徒

の先生方は、外部講師と連携しながら授業構築や取材先との調整、取材先への下見などに積極的に取組んでいた。その結果、多くの方々が生徒の想いに応える形で協力をし、サッカー班には広野中の卒業生でもあるいわきFCの選手たちからメッセージが届くなど、予期せぬプレゼントもあった。

例年同様に若手映画人が外部講師としての役割を担い、生徒たちが向き合うテーマの深堀をサポートし、それをどのように切り取り、どのように表現するかに向き合った姿は、これまで以上に一体感を感じた。これは、例年以上に生徒との接触回数が増えたことも要素としてあるが、映画を生業にしている講師の職業人としてのプロ意識、さらには職業愛が生徒に伝わったことも要因の一つだと考えられる。こうした要素は、このプロジェクトをキャリア教育の一環としても捉えることを可能とし、ふるさと創造学にスパイスを入れる可能性を感じた。

10校の異なる大学から集まった学生スタッフも、そうしたグループでの学びを支えた大きな役割を担った。講師と生徒たちの間に立ち、それぞれのコミュニケーションが成立するように潤滑油になる他、生徒たちが何と向き合い、何を切り取ろうとしているのかなどを執着して考える姿勢は、プロジェクトの成功に欠かせない要素であった。

こうした多様なプレイヤーが協働をし、生徒たちのふるさと創造学としての到達目標とともに目指した取り組みであったが、今年度で3年目を迎え、広野中学では全学年が経験をするまで至った。今年度の成功の陰には、本年広野中学を卒業する3学年の生徒たちが初年度に取組んだこと、



教員と外部講師の活発な意見交換

そしてそれを繋いだ次年度の現2年生の蓄積があったことだと改めて感じる。こうした蓄積の上で今年度の成功があったことを鑑みると、今後に向けた検討課題も少し見えてくる。

その一つは、完成作品をどのようにして多くの町民に観ていただくかということである。これは初年度から毎年

抱えている課題でもあるが、生徒たちが今の地域を切り取り、未来について考えている姿と作品は、その地域で暮らす町民にとって大切な要素が多く含まれていると考えている。広蛸祭などで作品を鑑賞した町民などから感動したという感想をいただく度に、さらに多くの町民に観ていただける工夫が必要だと感じる。また、それは生徒たちにとっても大切な要素であり、先生でも保護者でもない第三者に評価を受ける場合は、彼らをさらに成長させるスパイスとなると考えられる。

二つ目は、「ふるさと」の再定義の検討である。震災後の双葉郡の状況から未来を切り拓くために設置されたふるさと創造学であるが、そこで指す「ふるさと」の形も月日とともに変容しているようにも感じる。誰かが定義した「ふるさと」ではなく、その言葉自体を生徒たちが問い、それぞれの「ふるさと」を定義することが、次のステップとして必要なのではないかと感じている。それは、近い将来に全国各地で直面するであろう、「どのようにしてふるさとを残すのか」という課題と向き合うことでもある。そうした問いを考え始めることは、その地域で暮らす自分自身と向き合うことでもあり、それは家族と向き合うことにもつながる。今後は、最少のふるさととしての家族を切り口に、映像教育の入口とすることも大いに検討できるのではないかと考えている。

最後に、今年度を通じて、本プロジェクトの意義について考え続けた中で、こう思うことが増えた。それは、「広野町における映像教育は、単に学校教育での生徒たちに対する取り組みではなく、関わるすべての人がそれぞれの感性や技術、知見や経験を持ち寄り、『町とどのように向き合うか』という課題に挑戦する、まちづくりのプロジェクトになりつつあるのではないだろうか」というものであった。こうした協働の機会をいただいた、関係各位に心から感謝を申し上げたい。

【参考】各地での発表（2017年・2018年）

2017年

10月14日（土） ひろの童謡まつり

10月28日（土） 広蛸祭

12月9日（土） 双葉郡ふるさと創造学サミット

11月25日（土） シネリテラシーフェスタ 2017（福島会場）

12月2日（土） シネリテラシーフェスタ 2017（新潟会場）

ふるさと創造学サミット



シネリテラシーフェスタ 2017



日本子ども映画コンクール表彰式

2018年

1月16日（火） 富岡3・11を語る会

2月16日（金） 内閣府NPOマネジメントフォーラム

2月17日（土） 第2回日本子ども映画コンクール（入賞）

2月25日（日） 第3回福島ESDコンソーシアム

3月3日（土） ALL東北教育フェスタ

3月11日（日） 横浜市藤が丘3・11を忘れない映画上映会



内閣府NPOマネジメントフォーラム

【参考】いわきFC 広野中学OBからのメッセージ



4DF 古山 瑛翔

広野中学校のみなさん、こんにちは、いわきFCの古山瑛翔です。
広野中学で楽しく過ごした日々や、多くのことを学んだ日々は、近い将来必ず生きてくると
思います。みなさんの日々の努力、頑張りが、さらなる福島の復興、発展へと必ず繋がります。
私も広野中学校出身として、福島県をより素晴らしい地にするため精一杯頑張りたいと思いま
す！また広野町Jヴィレッジの素晴らしいピッチで全力でプレーする日を楽しみにしています。

6MF 平澤 俊輔

中学生のときは、勉強、部活を一生懸命やっていました。中学でできた友達は、今でもご飯
を食べに行ったりしています。仲間を大切にしていまして、今を楽しんでください。広野町は自然豊か
でいい町です。これからJヴィレッジが再開するなど、ますます魅力ある町になることを願って
います。

10FW 平岡 将豪

みなさん、こんにちは、JFA アカデミー福島三期生の平岡将豪です。僕は中学の三年間を
広野中学校で過ごしました。広野中での生活で一番驚いたことは、膝当てと紅白帽をつけての無
言清掃です。あれだけは今でも忘れられません。笑 サッカー面では、広野グラウンドを拠点
とし、時々ヴィレッジでトレーニングをしていました。2018年夏のJヴィレッジ再開に向けて、
僕自身何かできることがあれば協力していきたいです。中学での生活はあっという間だったの
で、もっと勉強やスポーツに全力で取り組めば良かったという後悔もあります。皆さんはその
ようなことがないよう、日々の生活を大切に過ごしてください。

24MF 飯干 雄斗

みなさん、こんにちは、JFA アカデミー福島二期生の飯干雄斗です。僕にとって広野中学
校で過ごした三年間は本当に濃い時間であり、今でも忘れられない出来事が多く、大切な思い出
となっています。また、福島県のことを大好きになったきっかけになった三年間でもあります。
そんな福島県で特に世話になった「Jヴィレッジが再開にむけてのメドが立った」とい
うニュースを聞いて、本当に嬉しい気持ちになりました。福島県は復興に向けて確実に進んで
いる中、僕にできることは目の前のことを全力で頑張るしかないと思っています。みなさんも
大変なことが多くあると思いますが、勉強に部活に頑張ってください。僕たちもいわき市を東
北一の都市にするというビジョンのもと、これから頑張ります。



平成29年度 広野町 いいな広野 わが町発見
ふるさと創造・映像教育プロジェクト 報告書

発行：ひろの映像教育委員会

編集：一般社団法人 リテラシー・ラボ

デザイン：千葉 くらら



© ひろの映像教育実行委員会